

# 豊島与志雄と中国

——ある汎アジア主義的な心情を中心にして——

張 鈴

## はじめに

戦後、一九四六年四月に掲載された座談会「文学者の責務」（初出『人間』）が文学者に対する戦争責任追及の幕を開いた。以来、日本の「国民国家」の内部とその「外部」から糾弾と反省が繰り返された。そこに、対外戦争の側面が重視されているという問題がある。確かに、近代において、大日本帝国は拡大する一途であり、その意味で満洲事変、盧溝橋事件と真珠湾攻撃は一直線である。人々はこの考えに基づき、その間における知識人の戦争責任を追及した。延々と続いた戦争のいづれかの時期において戦争支持の発言をすれば、戦争責任があると断定し、糾弾を加えた。しかし、日本内部の思想水脈、知識人の内的文脈に則してみれば、戦争責任の問題は異なる様相を示す。例えば、米谷匡史は、三木清が日中戦争に「世界史的意義」を与えて後、反戦派の多くの知識

人々は沈黙から出て「戦時変革」の道に踏み込んだと観察している。<sup>(注1)</sup> 総力戦に身を投じたことは対外戦争の側面からすれば、これらの知識人の行動は戦争協力以外の何物でもない。しかし、日本内部の思想水脈に則してみれば、いわゆる「戦争協力」にはそれぞれの行動論理があり、<sup>(注2)</sup> 上述したりべラルな知識人の場合、行動論理は往々にして、反面、積極的な変革の意味を持つ。そのため、リベラルな知識人が政府・軍部の圧迫を受けた。同様の理由で、戦後になつても彼らは往々にして、戦争責任の自覚が乏しい。また、若い世代によって「オールド・リベラリスト」として棚上げされ、戦争責任追及もほぼされないまま今日に至り、忘れられている。

二〇一三年三月、日本はアメリカ主導の環太平洋戦略的経済連携協定（TPP）交渉に参加する旨を公表した。一方、ASEANプラスシリー（中日韓）もその一つである「東アジア共同体」の構想は色褪せつつあり、日中

関係が緊迫し、日本民衆の対中感情や中國民衆の対日感情が悪化している。このような時期にこそ、上述した戦争責任追及のやり方を止揚し、リベラルな知識人の戦時下の言動を明確にし、再評価する必要があると思われる。

小論は以上の認識を踏まえ、戦後の日中友好運動の先駆者であるリベラルな小説家豊島与志雄について、彼の戦時下の中国をモチーフ・舞台にした小説及び中国関係の言論を分析し、そのことによって、汎アジア主義的な心情を抱くりベラリストの果たした日中交渉史における役割を再考したい。豊島与志雄は汪兆銘政権管轄下の中国に四回も渡った。さらに戦後は内山完造、平野義太郎、原彪、本間喜一らと共に日本中国友好協会を創り、同協会の副会長（会長空席）に選出された。作家としての豊島与志雄の名はほとんど忘れられているが、「レ・ミゼラブル」や「ジャン・クリストフ」の名訳者としては広く知られ、残された小説、童話、評論などの作品は少ない。戦後になり、彼は日本ペンクラブの再建などにも活躍した。このような豊島与志雄に対する研究はまだ不十分である。<sup>(註4)</sup>ここに試みる整理は、リベラリストとして多様な面を持つ豊島与志雄に対する理解を深める手がかりにもなり、同時に、戦時下におけるリベラルな知識人としての彼の主体的な行動と時勢との関係や、日

本の戦前のリベラリズムとナショナリズムとのかかわりを明らかにする可能性の扉を開くことができると考える。

## 一、中国への関心

豊島与志雄が中国に注目するようになったのは、一九四〇年からのことである。文壇では、一九三八年頃から、従軍作家や戦争文学などが日常的な話題になり、文壇の中心にいた彼もペン部隊への協力を求められたが、それには参加しなかった。

豊島与志雄の最初の中国訪問は谷川徹三、加藤武雄と共に、一九四〇年三月に実現された。中日文化協会（一九四〇年七月発足）と日華文化協会（設立を見送られた）設立の検討のために、上海を中心とする諸都市を視察した<sup>(註5)</sup>。この一九四〇年三月の旅行を皮切りに、豊島は同年九月内山嘉吉（内山完造の弟）と青島・濟南・北京へ、一九四三年十一月には阿部知二<sup>(註6)</sup>と上海・南京へ旅行した。この第二、第三回の中国旅行についての資料は極めて少ない。阿部知二との訪問は、日中作家交換計画によって上海に渡ったもので、接待したのは上述の中日文化協会だった。豊島は一ヶ月ほど滞在してから日本に帰国したが、阿部は翌年三月まで上海に滞在した。その後豊島は、一九四四年十一月、第三回大東亜文學者大会に

参加するために南京へ赴き、引き続き上海・北京へと足を延ばした。第三回大東亜文学者大会について、中国へ赴く豊島は次のように述べる。「公の会議そのことは、大体文学報国会の代弁者として行くつもりであるから、代弁者たる責を果したいと考へてゐる。個人的のことを言ふと、（中略）大会そのものについての関心は、かう言つては悪いが、割に尠いといふ気がする」。<sup>(注6)</sup> ちなみに大東亜文学者大会は、第一回東京（一九四二年十一月）、第二回東京（一九四三年八月）、第三回南京（一九四四年十一月）と計三回開かれたが、豊島は全回参加した。

そして、第三回大会の南京行きが、豊島の四回目・最後の中国旅行となつた。戦後、彼は日中友好に力を尽くしたが、中国の土地を踏んだことはなかつた。

豊島与志雄が発表した中國関係の評論と小説は概ね三つの時期に分けられる。一つは一九四〇年中国訪問直前から一九四一年までの二年間である。その時期、豊島は中国がモチーフとされる小説、情勢に関する評論を多く書き、各種の座談会に出席していた。二つ目の時期は「大東亜戦争」勃発から終戦までである。その時期に書かれた作品「秦の憂愁」（初出『文芸』一九四四年十一月）と「秦の出發」（初出『文芸』一九四五四年四月）は添削を経ずに戦後の一九四七年に出版された『秦の憂愁』

（東京出版）に収録された。三つ目の時期は、戦後から一九五五年亡くなるまでの時期である。小論はこの三つの時期を設定して分析を試みる。

豊島与志雄の小説について、これまでには「多彩な芸術的手法を駆使し」、「ときに象徴的、ときに写実的、幻想的な技法をつかいわけ」（平野謙）と評価すると同時に、「謎の存在」（谷川徹三）として、作品の内容に関する戸惑いを隠さなかつた。その後、中国関係の小説は関口安義、林恵子などによって解説が試みられた。従来の研究者は、豊島の「現実の重圧があまりに大きすぎるとするならば、現実の転位たる文学の世界に於て、その重圧を乗り越えて明らかに夢みる境地はないものであろうか」（『白塔の歌』後記）という発言を、一九四一年という時代と合わせて考え、小説の創作が「苦渋な社会状況と無縁ではな」<sup>(注7)</sup>く、豊島なりの時代に対する抵抗と評価している。しかし、以下で詳しく分析する通り、筆者には、ほぼ同時期の豊島の発言と照らし合わせた結果、これらの作品に、中国訪問の経験や中国人との交友などが織り込まれていることが分かつた。また、小説には時局への抵抗ではなく、作者豊島の現実に対する期待、さらに戦争末期の小説には、時局への賛同が潜んでいると考える。豊島は「ときに象徴的、ときに写実的」という技法を中

国連の小説にも駆使したのである。その「写実」の部分は、私小説のように現実の作家自身を小説の中の主人公に投影するのではなく、他人の経験を主人公に移植し、転位、加工を施して、現実との関連性を希釈している。

例えば、豊島与志雄が曾て息子の豊島徹に、「北京へ行つた時にね、田舎の大きな門の傍に大きな桶があつてね、貧しい身装りの背の高い男がじっとみつめているのさ……」<sup>(注11)</sup>と語ったことがある。このシーンは、場所などが変えられ、「伝えるところに依りますと、或る年の初夏の頃、この張家の屋敷の一隅にある大きな桶をじっと眺めて、半日も佇んでいる、背の高い男がありました。」<sup>(注12)</sup>という

「立札」（初出『日本評論』一九四一年一月）の冒頭に投影されている。また、豊島は仙人の非現実的な世界を想像することに耽っている。彼の中国関係の小説に現れる

修道、靈感などのシーンは、親友で紅卍字会の有名なメンバーである吳清源（開碁の名人）をモデルにしたと推測される。これらの、現実にあるような、ないような出来事と、幻想の世界にしか存在しない出来事との組み合わせに拠ることが、彼の中国関係の小説に神秘的な雰囲気が漂うゆえんである。

## 二、一九四〇年前後、空白の青写真

最初の中国訪問直前、豊島は「三つの嘘」（初出『知性』一九四〇年三月）を発表し、中国関係の小説を書き始めた。小説とはいえ、作者はそれを「近代伝説」と位置づけ、です・ます体を用いた説話に近い物語として書いた。「三つの嘘」は、ある父親が三人の息子にそれぞれ似たような嘘をつき、彼らの反応を見て失望して死に至ったという筋で、似たような出来事を三回反復させている。そういう物語の進み方は、中国の伝奇歴史小説の「三つの反復」<sup>(注13)</sup>という手法の模倣と考えられる。

豊島が中国を訪ねてから、彼の中国関係の小説の筋は複雑になっていく。例えば、「碑文」（初出『文芸春秋』一九四〇年十二月）を読むと、崔といふ豪家があり、当主の崔之庚、夫人の崔範、娘の崔冷紅と使用人の徐和がそこに住んでいる。甥の曹新は、崔範の病気が重くなつたのを聞いて急いで崔家に駆け込んだ。徐和と酒を飲んだとき、曹新は徐から崔之庚が知識人から転身して長者になった過去を聞き出し、崔之庚らの事業に加担しないという意思を示した。曹新は崔之庚が徐和を殺すシーンを目撃して崔家を離れたが、五年後に帰つて崔冷紅に結婚の申し込みをする。それと同時に、徐和のような存在

に対して闘うという信念を刻むために、碑を建てるこ  
とを崔之庚に勧めた。しかし、崔之庚は後に、誰かに殺さ  
れる。河のほとりに、無銘の碑が一つ建てられた。多く  
の謎を残したまま、小説は終わっている。

この小説の中に、修道の神秘的なシーンがある。徐和  
を殺した崔之庚が濟南にある紅十字会の母院に参り、  
「祈念修道」をするシーンである。瞑想をしている崔之

庚は、四方八方を見ている目玉だけの眼の幻影を見た。

その眼は、澄んでるのか、濁ってるのか、全く分  
りません。そんなことは問題でありません。ただじつ  
と開いてる眼です。

何を見るのでしょうか。いや、見てるのではありません。  
おのずから見えるのです。見通し見抜く  
鋭い眼ではなく、ただ何でも見える眼です。

何物でも、何事でも、その眼に映ります。いくら  
映っても、その眼は一杯になることがありません。  
底なしの眼です。次々に、あらゆることを見て取り  
ます。見て取って、それをどうしようというのでは  
ありません。ただ見て取るだけです。

だから、なんという豊富さでしょう、なんという  
知識の堆積でしょう。然し、ただそれだけのことで

す。それを利用すれば、商売は儲かるでしょう、出  
世は出来ましょう。然し、それを消化して血肉にま  
で生かことは、出来ないので。それは石ころを寄  
せ集めたようなものです。

そのような眼です。それが一つ処にいつまでもじつ  
としています。(『碑文』)

この眼については、崔之庚の目であり、徐和の目でも  
あると小説に説明されている。関口安義は「日本支  
配下の中国知識人の眼ではなくて何だろうか」と指摘し  
た。しかし、その眼が「日本支配下の中国知識人の眼」  
であれば、徐和が崔之庚によって殺され、さらに崔之庚  
が誰かによって殺されたことはどのような物事を象徴す  
るのか、合理的な説明がつかない。むしろ、その眼は、  
徐和、崔之庚のような古い世代の知識人の眼として理解  
したほうがよいと思われる。それは一切をはつきり把握  
することができるが、生産性がない眼であり、その意味  
で理想的な眼ではない。徐和、崔之庚の死は、これらの  
眼の持ち主に対する否定だと考えられる。物語の終わり  
に生き残ったのは、若い世代の曹新と崔冷紅二人しかい  
ない。この若いカップルが如何に新しい生活を展開する  
か、作者の豊島は書いていないが、そこに彼の希望と期

待が込められていると思われる。しかし、具体的に展開されていないため、作者の希望を理解する術がない。このような現象は小説集『白塔の歌』（一九四一年、弘文堂書房）の他の小説にも見られる。

小説集『白塔の歌』は全体として、作者の意図をはつきり捉えることができない作品である。それは、従来の研究が指摘してきたように小説の内容それ自体の趣旨が不明だからというのではなく、個々の小説作品から意味と趣旨は受け取れるが、小説集としての、大きな方向性、作者の意思が把握できないからである。

「三つの悲憤」（初出『知性』一九四〇年十月）と「立札」は匪賊退治という共通のテーマをもつ。「三つの悲憤」では、知識人の阮東と范志清が阮の家族を率いて抵抗を完遂し、匪賊を撃退した。一方、「立札」では、使用人の朱文が一人で匪賊の巣窟に入って交渉をし、それによって、町の民衆たちは匪賊から被害を免れた。花田清輝は「立札」が「揚子江のほとりにそびえ立つ一本の楠の大木に託して、中国の人民の非暴力的な抵抗の伝統について語」<sup>(注)</sup>ったと高く評価したが、上で述べた粗筋からみれば、豊島は「立札」と「三つの悲憤」において、反抗と妥協という両方の可能性を提示している。花田清輝は、豊島に対して「インテーナショナリスト」・「自

由人」という先入観があるので、作品を好意的に取りあげたのである。もう一つの小説「白塔の歌」（書きおろし）は知識人達が関与したある事件の前後の出来事を語る。この事件は関口安義が、政治改革への知識人の献身として読んでいるが、政治家同士の闘争に対する認識を欠く知識人の犠牲として読んでも成立すると思われる。

これらの小説にある空白、両義性、不確定さについて、作者自身は次のように説明する。「作者は種々の事実の調査よりも寧ろ、人物の性格を掘ることに忙しかった。そしてそれらの性格に超越的な点があるとすれば、作者があまりに夢を楽しみすぎたからであろう。そして作品が超現実的になつてゐる点があるとすれば、作者があまりに象徴的に物を考えたからであろう。」（『白塔の歌』後記）。『白塔の歌』で作者の意図がつかまえきれないのは、作者自身が明確な理想図を持たないからなのである。しかし、その理想図が中国と関係があることには疑問の余地がない。中国を二度視察した後、彼は「民心把握の技術」（初出『現地報告』一九四〇年十一月）といふ短い文章を発表し、「眞に民心を把握する方法は、民衆自身をして先づ考へさせ、その考へ方を一定の方向に誘導する以外にない」、「例へば、個人としてではなく抽象的存在としての、頭山満的存在についての、本質的理解

を必要とする。」と説く。ここで、頭山満に象徴される汎アジア主義的な心情が示されている。一九四〇年、豊島は「東亜文芸復興」というスローガンを提示した。これについての検討は別の機会に譲る。

### 三、一九四四年前後、軍の政策への賛同

戦争末期の一九四四年前後、豊島は「動乱期の苦惱を通りこし、周囲に反撥して新たな生活を志向している」

「有力な精神の代表者」（『秦の憂愁』後記）秦啓源を主人公とした小説を構想し、連作の「秦の憂愁」、「秦の出発」を著した。即ち、「一種の在野文化使節として」

上海を訪ねた日本人星野武夫は上海にいる知識人秦啓源を文壇復帰させたがったが、秦啓源は星野の要請を断つて無錫に帰農する。この連作はそれまでのいくつかの出来事を物語っている。両作品とも、作者の一九四〇年、一九四三年の上海体験と想像が混在している。秦は無錫出身で、そのモデルは無錫出身の知識人陶晶孫ではないかとも連想されるが、小説の中で、秦の行方がなかなか明確にならないというプロットは、一九四〇年の上海訪問の間に、内山完造から聞いた知識人王独清<sup>(註15)</sup>の話に基づいたものと思われる。王独清は一九四〇年八月に上海で人知れず病死していたから、豊島は王に会った可能性

が極めて低く、小説にある星野が秦をようやく見つけてから、秦の農村への出発を見送るまでのプロットは、豊島の想像の産物であろう。星野武夫の誘いを断る時、秦啓源は自らが志向している「新たな生活」について、以下のように述べる。

「詩を作るより田を作れ、これも東洋精神の一つだ。」

星野はその意を汲みかねて、二つ三つ目叩きをした。

秦はだしぬけに、上海近郊の日本軍経営の農場のことを話しだした。そこには、台湾から来た本島人の青年たちや、附近の農村の娘たちが、数多く働いている。厳格な訓練と規律との中に働いているのが、今では皆、精気に溢れた朗かな表情をしている。青年たちはその農場を自分等の土地と感じ、もう台湾に帰る気持ちもない。娘たちは農場の仕事を楽しみ、喜んでそこに通勤している。（『秦の憂愁』）

上海近郊には「日本軍經營の農場」が確かにあった。豊島は一九四三年十二月十五日、上海から戻った後、「上海の若芽—明朗・働く本島、中国の青年」（『読売報

知』に心境を以下のように披露し、上海に駐屯する日本軍の農場にも触れた。

近郊に、○部隊（○は伏字、引用者）の軍農場がある。（中略）台灣から來てゐる本島人の青年が○○名なる。彼等は農場内に居住して、専らその労働に當つてゐる。日常、軍隊的な身體訓練に鍛へられ、また皇國民としての精神訓練に鍛へられてゐる。（中略）上海のこの農場の青年達は、まるで別途の人のやうに私の眼に映つた。彼等は元氣に朗かに伸び伸びと、大陸の大地の上で働いてゐるのだ。（中略）これらの若い男女に、私は将来への希望をかけたい。彼等そのものだけではなく、かかる種類の一種族の一若者である。（『上海の若芽』）

台湾青年が動員され、大陸で労働を強制されたが、豊島は彼等の「元氣」な姿を見て感心し、彼等に希望を託した。秦が星野に話した内容と『読売報知』に寄せた紀行文との類似性からすれば、「秦の憂愁」にある「上海近郊の日本軍經營の農場」が上の「○部隊」の設立した軍農場を指し、豊島が自らの気持ちを秦に重ねている可能性が高い。

「秦の出発」で、秦は上海にいる多くの苦力と乞食の生活の救済を以下のように計画する。集められた苦力と乞食は帰農させ、労働させ、「米麦の耕作の合間にには、棉を栽培してもよかろうし、豚を飼育してもよかろう。もしも棉栽培が全耕地の五パーセントに達すれば、その収穫は全東亜を優に賄えるし、豚の頸毛は生糸よりも優秀な利用価値がある。好んで乞食や苦力の生活に執着する必要はないのだ。」第一回の上海旅行を経験してから、豊島は生活が困難な人々に対する関心を持ち、彼らの方を考えていた。秦が案出した帰農はまさに、作者豊島が「上海に蟄居してゐる大衆」（『文化的孤島 上海への郷愁』、『読売新聞』、一九四〇年四月二十五日）を見て彼らのために考えだした安居樂業の方法である。

農業労働であれば、上海近郊の農場でもいいかもしないが、秦啓源は故郷の無錫へ戻つて帰農しようとする。

「秦の出発」において、秦啓源は上海を離れ、農村に戻る原因を述べる。上海はすでに農精神を「全然喪失した」。それに対しても、無錫は農精神を持つだけではなく、農精神を失っていない軽工業地帯を持つ。「本当の生産の喜びが現代にも生きてくる」、「農精神を失わない工業」こそ、秦の理想的な工業だ。

さらに、秦は「農精神を基調とした新たな構想の国民

組織」という主張を掲げた。

「いや、私が言うのは、農精神を基調とした新たな構想の国民組織を行なわなければ、中国は国家として存立し得ないということです。嘗ての新生活運動だの、近頃の新国民運動だの、保甲組織だの、そういう浅薄なものでは駄目だということです。」

#### (『秦の出発』)

帰農を主張する農本主義の思想は豊島の早期の作品にも登場するが、それは素朴な農本主義で、肉体労働、生産への憧れというものが唱えられる。<sup>(注17)</sup>一方、秦の物語に見られる苦力と乞食を労働力にして農に従事させ、さらに東アジアをまかぬ農本主義的な考えは、農業を國の本と考える国本的農本主義の大東亜版として捉えられる。戦時下、日本の農業政策は「農業人口の定有と國民食糧の確保」を二大目標とした。<sup>(注18)</sup>こうした政策は日本占領区域の拡大につれて、アジアに広められたと考えられる。<sup>(注19)</sup>帰農は乞食、苦力の生活の基本を保障すると同時に、農業人口の定有と食糧の確保に向けて解決の道を提供する方法で、「國」の基本である農業を固める政策だ。丸山真男は日本ファシズムと絡んだ農本主義の特徴を「反官

的、反都市的、反大工業的、反中央集権的」傾向とそういう農本主義を批判した。<sup>(注20)</sup>農本精神を完全に喪失した都市上海を離れ、軽工業をもつ農村の無錫に希望を託し、さらに新生活運動や新國民運動及び保甲組織<sup>(注21)</sup>を否定するという秦の考えはまさに、丸山が批判したのとほぼ同じ傾向を示す。秦のこのような考えは、豊島自身は意識していないかもしれないが、かなり軍國主義者に近いと考えられる。国本的農本主義が豊島の共鳴を得たのは、「助け合うアジア」に対する想像と、現地の難民・乞食の生活難に対する思考が働いたためだろう。

一九四二年一月の「文化的構想」(中央公論)で、豊島は「〔支那事変〕に一種の内争的、内乱的な感じがあ」り、「今度の宣戦によつて、初めて暗雲が晴れて蒼空が見られるといふ気持ち」を告白した。その日中戦争反対、太平洋戦争支持の姿勢は、竹内好の「疑惑がわれらを苦しめた」が、今度の宣戦によつて「天高く光清らに輝き、われら積年の鬱屈は吹き飛ばされた」の発言を想起させる。リベラルな思想を多少なりとも持つ人々は、日中戦争に対しては疑問を持っていたが、西洋を押し返すことが唱えられる「大東亜戦争」の段階になると、人々は疑問を抱かずに戦争を支持するようになった。竹内は「大東亜戦争」勃発後間もなく、その戦争の欺瞞性を見

通し、大東亜文學者大会への出席を断つた。しかし、豊島は個人的な関心が「割に渺い」（抱擁的指導意識を以て）『文学報国』三八号。と公言しつつ、日本文学報国会の公務として大東亜文學者大会に全三回とも参加した。終戦直後の八月十六日に公開された「吾等の志向」（『東京新聞』）に、「大東亜戦争」をアジア解放のための戦争と見なしている豊島の考えが窺える。

彼方には万邦共栄の理念があり、近くには大東亜解放の理念がある。この後者、眞の解放を目指す大東亜の意識は、大東亜各地に萌え出てゐる。その萌芽は摘み去られることは出来ないであらう。重慶政

權においてさへ然りであると信ぜられる。そしてこの意識のなかで、東洋文化の精神と新發展とが準備されてゐる。これの哺育も我々の義務である。（『吾等の志向』）

上海に於ける私の立場は、中日文化提携についての補助役みたやうなものだつたが、その文化提携なるものが、だいたい時局色に塗られて面白くなく、私は勝手気儘な行動をし、親日派の文化人とは余り交らず、共同租界地域にもぐり込み、趙南圭や其他の一風変つた人々と、自由な放談ばかりしてゐたのである。（『上海挿話』）

大東亜戦争をアジア解放の戦争と見なすという見方は豊島の浅い現実認識を示し、このような現実認識を持ち、民衆に宣伝した豊島与志雄は、やはり戦争責任からは免れられないのではないか。

#### 四、一九四九年前後、日中友好のために

一九四九年十月、豊島は何年ぶりかに中国を舞台とする小説『上海挿話』（『新潮』）を公開した。「私」を主人公にし、豊島本人の経験を「私」に込めた私小説風の表現形式は、豊島の中国関係の小説の中では珍しい。この小説は、中国語雑誌にある文章を発表することによって知り合った中国知識人との交際や、「私」の上海における言動を回想する風に書かれている。「私」は下のよう

に告白した。

時間の異なるいくつかの経験を、虚構の内容と共に一つの物語に入れるのは、豊島の小説の特色<sup>(注23)</sup>だが、ここで時間の設定が問題になる。小説『上海挿話』は一九四一

年一二月の太平洋戦争勃発直前に時代が設定されたが、實際、豊島が陶晶孫などの知識人と交際を持つようになつたのは、上海の中国語雑誌『文友』に「中日文化提携的問題」（昌銘訳）を発表した一九四四年のことであり、その際、共同租界はすでに消滅していた。共同租界が存在している一九四〇年、豊島与志雄は租界の境界線である蘇州河を強く意識しており、中国知識人は「どこか心の扉を閉してゐる」と記述した。しかし、豊島はあえてこの私小説風の作品である「上海挿話」に、「私」が太平洋戦争勃発直前に、最初は「中日文化提携」に従事し、そして断念して「共同租界地域にもぐり込」み、「一風変つた人々と、自由な放談」をする様子を描いた。それは、作者の中国に対する熱意による現実から文学への「転位」としか言えない。

「上海挿話」には趙南圭という中国人が現れた。日中の友人が抱く、わけが分からぬままお互いを嫌がる気持ちを、「国際的小兒病」と名付けて皮肉を言う趙南圭は、読者の印象に残るだろう。「上海挿話」に提唱される国境を超えた、度胸のある彼の態度は、一九五一年に

河出書房）の世界精神につながる。

「上海挿話」が一九四九年十月に公開されたことから推察すれば、「私」を主人公にしたこと及び時間の設定は意図的である。「上海挿話」は中華人民共和国の成立（建国式典は一九四九年十月一日に行われた）に合わせて書かれたのである。豊島は私小説風の、主人公が作者と同一視されがちな表現方法を取り、中国との理想的なつきあい方を提示すると同時に、「私」の告白を通して、戦時下の上海における作者の言動の戦争協力疑惑を払拭しようとしているかに見える。このような、日中友好を唱えながら事實をごまかそうとする行為から、豊島の戦争責任に対する自覚の乏しさが窺えよう。

### おわりに

豊島与志雄の中国関係の小説を以上のように概観してきた。一九四〇年前後、豊島は日中戦争に「一種の内争的、内乱的な感じ」（「文化の構想」『中央公論』一九四二年一月）をみて、東洋に新しい文芸の復興を漠然と期待し、唱え始めた。そして、戦争末期、豊島個人の考えが国家の政策と合致するようになり、豊島は軍の政策に賛同を示した。しかも、戦後に書かれた小説「上海挿話」は豊島の戦争責任に対する自覚の乏しさを露呈している。同時に、豊島は同じ小説において日中のはざまで

生きる理想的な人間像を提案し、日中友好運動に寄与した。戦時下の軍部への思想的な接近と戦後の日中友好の

提唱は、「転向」や「豹変」に見えるが、そのバックボ

ンは変わっていない。それは汎アジア主義的な心情である。豊島はこの心情を戦前戦後貫き通し、独立した思考も持っていた。そのことは肯定すべきである。一方、豊

島本人は戦争末期の自らの言動を曖昧に糊塗し、戦争責任の自覚の乏しさを示した。今までの研究者は、豊島をリベラリストでヒューマニストとして、戦時下の発言が

不本意だと見なし、この部分を無視してきた。小論はこれららの発言に行動論理があると主張し、その行動論理を明らかにした。

最後に、豊島にある汎アジア主義的な心情を考え直さなければならない。アジア主義は日本の侵略の口実として利用されてきたが、その原「アジア主義」には、非西洋であるからこそそのアジアの連帯意識、即ち「東アジア共同体」の理想と通じる部分がある。日中交渉の角度からみれば、豊島与志雄のような知識人が抱く、汎アジア主義的な心情を抱擁的な意識をもつて真摯に受け止める必要があるのではないか。問題は、日本及びかつて帝国主義日本に侵略された中国をはじめとするアジア諸国が、「大東亜共栄圏」の幻想を払拭すると同時に、あえてア

ジア主義の理想主義的な部分を評価する勇気があるか何かということである。

\* 豊島与志雄の小説、小説集後記は初出を本文に記入し、『豊島与志雄著作集』（一九六五～一九六七年、未来社）から引用し、著作集に収録されていない評論などは、出典を文中に記す。旧漢字は適宜新漢字に改め、名称表記、仮名遣いについては出典のままとした。

#### 注

(1) 赤澤史朗「戦後日本の戦争責任論の動向」（『立命館法学』、一〇〇〇年三月）。

(2) 米谷匡史「戦時期日本の社会思想」（『思想』、一九九七年十二月）。

(3) 豊島与志雄（一八九〇～一九五五）。福岡県朝倉郡生まれ、第一高等学校を経て東京帝国大学文学部仏文科卒業。

第三次「新思潮」同人で「湖水と彼等」で注目されるようになつた。法政大学、明治大学の教授を務め、日本ベンクラブ理事。

(4) 一九六五年、未來社によつて『豊島与志雄著作集』が出版され、豊島評価は試みられてきたが、全面的な研究は関口安義の『豊島与志雄研究』（一九七九年、笠間書

- 院）と『評伝豊島与志雄』（一九八七年、未来社）を待たなければならなかった。ほかに、林恵子「異郷への遊歩——豊島与志雄と神西清」（森安理文編『近代説話文学の構造』一九七九年、明治書院）、永淵道彦『豊島与志雄論』（一九九七年、双文社出版）と『豊島与志雄への測鉛』（二〇〇五年、花書院）、中野隆之『豊島与志雄童話の世界』（二〇〇三年、海鳥社）が挙げられる。
- (5) 第一回中国旅行については拙論「限られた視界——豊島与志雄が見た一九四〇年の上海」（『JunCture』、二〇一一年三月）を参照。
- (6) 豊島与志雄「抱擁的指導意識を以て」（『文学報国』、一九四四年十月二〇日、日本文学報国会）。
- (7) 平野謙「文学史上の光榮と孤立」（『豊島与志雄著作集 内容見本』、一九六五年、未来社）。
- (8) 谷川徹三「謎の存在」（『豊島与志雄著作集 内容見本』（前掲））。
- (9) 林恵子「異郷への遊歩——豊島与志雄と神西清」（前掲）。
- (10) 平野謙「文学史上の光榮と孤立」（『豊島与志雄著作集 内容見本』（前掲））。
- (11) 豊島激「父のこと二つ三つ」（『豊島与志雄著作集VI』月報）。引用は豊島与志雄が豊島激とお酒と飲む時の話。
- (12) 「三つの反復」とは、「孫悟空 三打白骨精」（『西遊記』）（一九九七年、京都大学学術出版会）。
- (13) 関口安義『豊島与志雄研究』（前掲）。
- (14) 花田清輝「解説」（『豊島与志雄著作集IV』）。
- (15) 王獨清（一八九八—一九四〇）、陝西西安生まれ、一九一八年に日本とフランスへ留学した。後期の創造社のメンバーである。一九三七年、故郷に戻った噂があつたが、一九四〇年八月三十日亡くなるまで上海に隠居していた。
- 亡くなるまで、王はペンネームを変えて文章を発表していくが、内山完造は彼について「さつぱり行術がわからん」と嘆いた。（豊島与志雄、谷川徹三、加藤武雄、内山完造等「座談会 日支協力に俟つ大陸の新文化」（『大陸新報』一九四〇年三月十六日））。
- (16) 豊島与志雄、谷川徹三、加藤武雄、内山完造等「座談会 日支協力に俟つ大陸の新文化」（前掲）。
- (17) 例えは「悪夢」（『改造』、一九二三年八月）「白日夢」（『新小説』、一九二三年八月）では、都市生活者の憂鬱と農村生活への贊美が対比的に描き出される。関口安義の『評伝豊島与志雄』（前掲）を参照。
- (18) 岩崎正弥『農本思想の社会史・生活と国体の交錯』（一

(19) 上海は当時、日本軍が經營する農場を除いて、日本上海青年会という組織によって上海總力報国会が成立された。

報国会が農場を設置し、在上海日本人はそこでの労働が強制された。上海市檔案館編『日本帝國主義侵略上海罪行史料匯編』(一九九七年、上海人民出版社) を参照。

(20) 丸山眞男「日本ファシズムの思想と運動」(増補版現代政治の思想と行動)、一九六四年、未来社) を参照。

(21) 新生活運動は一九三四年から一九四九年まで重慶国民政府が唱えた国民教育運動で、新国民運動は汪兆銘政府が一九四一年十一月から進めた、反日思想を一新するための運動。保甲という制度は社会管理制度として、清末民初を除いた長い時期に推進されていた。

(22) 竹内好「大東亜戦争と吾等の決意」(丸川哲史、鈴木将久編『竹内好コレクションI』、二〇〇六年、日本経済評論社)。

(23) 豊島の小説について「その素材の多くは自己の体験である。が、彼はそれを決してストレートには表現しない」という関口安義の評価は尤もである。『評伝豊島与志雄』(前掲)。

(24) 豊島与志雄「上海の渋面」(初出『中央公論』一九四〇年五月)、豊島与志雄等共著『上海』(一九四一年、三省堂) を参照。